

「活動を通した指導の在り方」について



ワーキンググループにおける検討事項・論点

1. 外国語を学ぶ意義

- AI時代に外国語を学ぶ意義の再定義と、外国語の「見方・考え方」の見直し

2. 目標・内容の一層の構造化

- 「学びに向かう力・人間性等」の整理等を踏まえた目標の示し方
- 「高次の資質・能力」（「知識及び技能の統合的な理解」「思考力・判断力・表現力等の総合的な発揮」）を中心とした内容の一層の構造化

3. 発信力強化

- (1) グローバル・多文化共生社会の担い手の育成
(外国語で他者とコミュニケーションを図る意欲等の育成)
- 英語を学ぶ動機付けや児童生徒の目標設定の在り方
 - 動機付けを強化するための話題・活動の在り方
- (2) 英語の使い手の育成（英語運用能力の育成）
- 校種間接続の課題等を踏まえた指導内容（話題・活動等）の段階的な示し方
 - 5領域の活動を通した知識及び技能の指導の在り方（語彙や文法の指導を含む）
 - 科学的知見を踏まえた学習プロセスを意識した指導の在り方
 - 高等学校の科目（特に「論理・表現」）の在り方
 - AIを含むデジタル学習基盤の活用の在り方

4. 児童生徒の英語力の把握・評価

- 「学びに向かう力・人間性等」の評価の新しい整理を踏まえた評価等の在り方

5. 柔軟な教育課程

- 義務教育における調整授業時数制度や高校における科目の柔軟な組み替えや履修の免除を可能とする仕組みを前提とした場合に、考えられる教育課程・学習指導の工夫の在り方

6. 指導体制・環境整備等

- AI時代の教師・ALT等の役割の再定義
- 教員の資質（英語力・授業力）向上の方策と、ALT等との連携の在り方
- 外国語を使う機会の充実の在り方

7. 英語運用能力に関する社会全体の課題

- 英語運用能力に関する社会全体の課題と、学校教育において取りうる対応の方向性

8. 英語以外の外国語

- 英語以外の外国語の推進方策

活動を通した指導の在り方



【現状と課題】

1. 「言語活動」に必要な要素

- 外国語の目標の柱書きに「言語活動を通した指導」が位置づけられたことにより、5領域の活動を通した指導の推進に一定の進歩が見られる
- 一方、告示本文に、「言語活動」に必要な要素が規定されておらず、「言語活動」の解釈のばらつきがみられる。
※多様な活動をどこまで「言語活動」に含めるのか等については、様々な受け止めがある状況

2. 「言語活動」を通した効果的な指導

- 目標の柱書の「言語活動を通して…育成する」という規定ぶりが、言語活動以外の活動は行ってはならない、望ましくないとの誤解を生じさせているとの指摘がある
- 「内容」の「知識及び技能」においては、「実際に英語を用いた言語活動を通して…（言語材料を）理解するとともに、言語材料と言語活動とを効果的に関連付け、実際のコミュニケーションにおいて活用できる技能を身に付けることができるよう指導する」としているが、語彙や文法等の知・技を指導する効果的な方法が分かりにくいとの声がある

3. 英語使用と日本語・母語使用の関係

- 中高では授業は生徒の理解の程度に応じた英語で行うことを中心としつつ、補助的に日本語を用いることも可能としているが、日本語使用を禁止しているとの誤解を生んだり、教師・外国語指導助手（ALT）等の英語が生徒の理解の程度に応じたものとなっていない事例もある



【方向性と具体的論点（案）】

1. 「言語活動」に必要な要素と示し方

- 分かりやすく使いやすい学習指導要領という方針に基づき、学習指導要領本文において、「言語活動」において必要な要素を具体的に書き下して示すべきではないか

参考資料①・②

2. 知・技・思・判・表を育成するための活動を通した指導の在り方

- 知・技・思・判・表を育成するための活動を通した指導の在り方を整理し、学習指導要領の内容の取扱いや解説で示すべきではないか
- その際、現行は「言語活動を行う際は…言語材料について理解したり練習したりするための指導を必要に応じて行う」としているが※、「練習」という言葉から想起されるイメージが様々であることから、適切に伝わるよう記載を工夫すべきではないか

※小・中学校の学習指導要領における記述。高校においては本文に「練習」に関する記述はない

- 併せて、学校現場の負担を軽減しつつ、効果的な実践が行いやすくなるよう、第二言語習得の研究や認知心理学、学習科学などの知見も踏まえ、教師の指導や学習者の自己調整学習において参考となる学習動画等を提供すべきではないか

参考資料①・②

3. 英語使用と日本語・母語使用の関係

- 「授業を生徒の理解に応じた英語で行うこと」を堅持しつつ、生徒の理解に応じた英語を使って指導する際に活用できる表現集や動画等を提供するべきではないか
- 併せて、解説で教師による補助的な日本語使用や、生成AIの効果的な活用も含め、英語学習における児童生徒の母語使用について参考となる考え方を示すべきではないか

※上記の検討にあたっては、第二言語習得や学習科学の知見を活用すべきではないか

参考資料②



【現状と課題】

4. 指導すべき文法事項の在り方

- 中学生が英語の学習が好きではない理由として、文法の難しさや単語を覚えることの難しさが上位
- 前回改訂で、語彙数が大幅に増加し、中学校で指導する文法事項が増加。こうした中、特に中学校的教科書で、難易度が高い語彙や文法の用法等（※）が含まれるなど内容が高度化し、指導や学習の負荷が上がっているとの指摘
- これらが相まって、英語を学ぶ意欲の向上や発信力の強化にあたっての課題となっている可能性

（※）現行の中学校の学習指導要領には「受け身」が位置づけられているが、教科書には難易度の高い用法も掲載されている

（例）現在（A1.2）

過去（A1.3～A2.1）

未来（B1.1）中2：3社 中3：5社に掲載

助動詞+受動態（B1.2）中2：4社 中3：5社に掲載

現在進行形（B1.2～2.1）現在完了形（B2.1）中3：4社に掲載

※CEFR-Jレベルについては「CEFR-J Grammar Profile 教員版」を、教科書の掲載数については「CEFR-J Grammar Profile 文法項目頻度リスト（2022-24年度使用開始の中學・高校検定教科書）」を参照。

なお、教科書の掲載数は「肯定平叙文」の数であり、否定文や疑問文等は含まれていない



【方向性と具体的論点（案）】

4. 指導すべき文法事項の在り方

- 生徒がコミュニケーションにおいて重要な文法等を理解し、それを使って英語を理解でき、伝えたい内容を伝えられるよう、中学校の学習指導要領の「内容」において、文法項目のうち使用頻度の高い用法を具体的に明示することにより、指導対象を焦点化し、難易度を適正化してはどうか。
- 上記で指導対象から外すもののうち、必要なものは高校で取り扱うことを明確化してはどうか

（例）

現行：受け身

改訂後：受け身（現在、過去、willを用いた未来など）

※学習指導要領への記載に当たっては専門的な検討が必要

重要なポイント

①・②を関連付けて指導することが重要であり、②においては、①につながるような指導を行うことが重要

(①が重要であり、②にとどまつてはいけない。一方で、①を効果的に行うためには、②を行うことも必要。
 ①と②の順番は必ずしも一様ではなく、往還が重要)

<②を①につなげるための留意点>

- ・①の機会や目的が最初に共有され、児童生徒に①に向けた自分なりの目的意識を持たせる
- ・①の活動に必要な特定の表現を提示し、それを使って短いやり取りをするなど、児童生徒が①に向けて必要な活動を行う
- ・児童生徒が①に向けて授業内外で準備を行えるようにする（家庭学習との連携や学習方略の活用など）など

①コミュニケーションを行う活動

（主に思・判・表を育成）

※知・技も同時に育成されて深まる

コミュニケーションを行う目的や場面、状況などに応じて
 外国語で理解したり、表現したり、伝え合ったりする活動

一体的育成

家庭学習との連携

※以下の各例は中学校段階を想定した活動・指導の一例であり、
 特定の活動や指導を推奨するものではない。

- ・海外の生徒とオンラインで、相手の食文化に合わせておすすめしたい地域の食べ物を紹介し合う
- ・クラスメイトと、相手の好みに合わせておすすめしたい地域の食べ物を紹介し合う

- ・接続詞も使いながら、おすすめしたい地域の食べ物と選んだ理由を伝え合う

②外国語による理解・表現の質を高めるための活動等

（主に知・技を育成）

音声、語彙、文法等をコミュニケーションを行う場面や状況、
 使われる文脈*などに応じて理解・活用する活動等

*音声、語彙、文法・文構造等を解説したり、一定程度文脈等と切り離して
 覚えさせたりすることもあるが、それらが単元や授業の中心となることは想定して
 いない

- ・接続詞whenを使って、好きな地域の食べ物の説明をする
- ・接続詞becauseを使って、好きな地域の食べ物とその理由を伝える

- ・教科書の文脈の中で接続詞を解説しつつ、関連のある文法事項をまとめて整理したり、他の使用場面における例文を豊富に取り上げたりして、理解を深める

外国語によるコミュニケーションを図る資質・能力を育成する指導の在り方等 に盛り込む要素（イメージ）

※本資料はあくまで盛り込むべき要素のイメージを示したものであり、実際の学習指導要領本文及び解説の文章は議論を踏まえて引き続き検討。

本文に盛り込む要素（イメージ）

第1 目標

- 外国語によるコミュニケーションを図る資質・能力を、コミュニケーションを行う目的や場面、状況などに応じて外国語で理解したり、表現したり、伝え合ったりする活動（※主に思・判・表を育成する活動）（①）及び外国語による理解と表現の質を高める活動（※主に知・技を育成する活動）など（②）を通して、次のとおり育成することを目指す
(知識及び技能) (思考力、判断力、表現力) (学びに向かう力、人間性等)

論点1

要活動に明確化な

論点2

ための活動と思・判・表を育成する
指導の在り方

論点3

日本語・母語使用の関係

第2 各言語の目標及び内容等 英語

3 指導計画の作成と内容の取扱い

- 上記①については、聞くこと、読むこと、話すこと、書くことの活動を行う
(※統合的な言語活動の観点等、学校種によって記載を工夫。以下同じ。)
- 上記①の活動を効果的に行うため、聞くこと、読むこと、話すこと、書くことにおいて、音声や語彙、表現、文構造、文法、【P】言語の働き等をコミュニケーションを行う場面や状況、使われる文脈などに応じて理解し、活用する活動（②）（※主に知・技を育成する活動）を行う
 - ✓ 上記①と②を相互に関連付けながら、知・技と思・判・表を一体的に育成する
 - ✓ 導入した語彙や文法等をすぐに話せる、書けるようにするよう指導を急ぐのではなく、聞いたり読んだりして理解する段階から、次第に話したり書いたりする段階へと発展させる
(※学校種に合わせて記載。以下同じ。)
- 授業全体を、英語を使用した実際のコミュニケーションの場面とするという目的を踏まえた授業展開を行う中で、積極的に英語を使用して生徒が英語に触れる機会を充実するとともに、生徒の英語使用を促す
生徒の理解の程度に応じた英語を用いるようにする

解説で記載する要素例（イメージ）

- 「外国語による理解と表現の質を高める活動など」とは、「3 指導計画の作成と内容の取扱い」の「音声や語彙、表現、文構造、文法、【P】言語の働き等をコミュニケーションを行う場面や状況、使われる文脈などに応じて理解し、活用する活動」を指す
- ①の活動では、児童生徒が既習事項等を最大限駆使して行うことの重要性
- ①の活動の中で、語彙や文法等の意味や用法等の理解が深まったり、流暢性が高またりするなど、知・技も同時に育成されることに留意
- 児童生徒の学習状況等に応じて、上記①と②のバランスを考慮する必要性
- 上記②の活動は、コミュニケーションを行う場面や状況、使われる文脈などと関連させて扱うことを中心とする必要性
- 上記①の活動を効果的に行うため、②の活動の適切なタイミング（①の活動の前に準備として行う、①の活動の間に行う、①の活動の後で行うなど）を考慮する必要性
- 具体的な指導例
 - 授業全体を、英語を使用した実際のコミュニケーションの場面とするため、生徒が理解の程度に応じた英語に触れ、英語を使用する機会を充実することの重要性
 - 上記の授業展開の中であれば、必要に応じて補助的に日本語を用いることも考えられる
 - 教師の補助的な日本語使用及び児童生徒の母語使用が考えられる場面と留意事項
 - ✓ 教師が日本語で簡潔かつ明示的に説明することで概念や表現形式についての理解が進む場合
(例：現在完了形などの時制の捉え方や時制の変化、語彙のコアミーニング)
 - ✓ 児童生徒が母語を使用することで英語の理解や英語によるコミュニケーションの質が深まる場合
(例：自分が伝えたい内容や伝え方を整理する場合、自分の興味関心に合った例文をAIで生成する場合（文法等に関する理解を深めたり、より伝わりやすい表現を検討するため等）)
- ※学習指導要領や解説への記載に当たっては、専門的な検討が必要

【参考】現行の学習指導要領における言語活動に関する主な記載（中学校の例）

※小学校、高等学校にも同趣旨の記載あり

【本文】

第1 目標

外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方を働きかせ、外国語による聞くこと、読むこと、話すこと、書くことの言語活動を通して、簡単な情報や考えなどを理解したり表現したり伝え合ったりするコミュニケーションを図る資質・能力を次のとおり育成することを目指す。

- (1) 知識及び技能 (2) 思考力、判断力、表現力等 (3) 学びに向かう力、人間性等

第2 各言語の目標及び内容等

英語

2 内容

[知識及び技能]

- (1) 英語の特徴やきまりに関する事項

実際に英語を用いた言語活動を通して、…言語材料…について理解するとともに、言語材料と言語活動とを効果的に関連付け、実際のコミュニケーションにおいて活用できる技能を身に付けることができるよう指導する。

[思考力、判断力、表現力等]

- (2) 情報を整理しながら考えなどを形成し、英語で表現したり、伝え合ったりすることに関する事項 …

- (3) 言語活動及び言語の働きに関する事項

① 言語活動に関する事項

(2) (※思・判・表)に示す事項については、(1) (※知・技)に示す事項を活用して、例えば、次のような言語活動を通して指導する。

ア (略) イ 聞くこと ウ 読むこと エ 話すこと [やり取り] オ 話すこと [発表] カ 書くこと

② 言語の働きに関する事項

言語活動を行うに当たり、主として次に示すような言語の使用場面や言語の働きを取り上げるようにする。

ア 言語の使用場面の例 イ 言語の働きの例

3 指導計画の作成と内容の取扱い

※「(1)指導計画の作成上の配慮事項」の記載は次頁参照

(2) 内容の取扱い

- ク 各単元や各時間の指導に当たっては、コミュニケーションを行う目的、場面、状況などを明確に設定し、言語活動を通して育成すべき資質・能力を明確に示すことにより、生徒が学習の見通しを立てたり、振り返ったりすることができるようにすること。

(参考) 前回の中学校学習指導要領（平成20年告示）

内容

- (1) 言語活動

英語を理解し、英語で表現する能力を養うため、次の言語活動を3学年間を通して行わせる。

ア 聞くこと 主として次の事項について指導する。(ア)～(オ) イ 話すこと ウ 読むこと エ 書くこと

- (2) 言語活動の取扱い

エ 3学年間を通じ指導に当たっては、次のような点に配慮するものとする。

(ア) ※次頁参照

(イ) 実際に言語を使用して互いの考え方や気持ちを伝え合うなどの活動においては、具体的な場面や状況に合った適切な表現を自ら考えて言語活動ができるようにすること。

(ウ) 言語活動を行うに当たり、主として次に示すような言語の使用場面や言語の働きを取り上げるようにすること。…

【参考】現行の学習指導要領における言語活動と練習の関係に関する主な記載

※高等学校においては練習に関する記載は無い

小学校

【本文】

3 指導計画の作成と内容の取扱い (1)指導計画の作成上の配慮事項(1)

ウ 実際に英語を使用して互いの考え方や気持ちを伝え合うなどの言語活動を行う際は、2の(1)に示す言語材料について理解したり練習したりするための指導を必要に応じて行うこと。また、第3学年及び第4学年において第4章外国語活動を履修する際に扱った簡単な語句や基本的な表現などの学習内容を繰り返し指導し定着を図ること。

【解説】

この配慮事項は、言語を使用する場面を設定し、実際に言語を使用して互いの考え方や気持ちを伝え合うなどの活動が重要であることを示している。

また、そのような活動を行う際には、単元又は1単位時間の初期段階で言語活動を通して学習内容として設定されている表現の音声を聞いたり話したりするなど、英語の音声に慣れ親しませる活動を開発し、言語の意味や働きなどを理解させることができることが大切である。その上で、後期段階においては、設定された場面の中で、自分の考え方や気持ちを互いに伝え合う言語活動を開発するなどの学習過程の工夫が大切である。

中学校

【本文】

3 指導計画の作成と内容の取扱い (1)指導計画の作成上の配慮事項(1)

ウ 実際に英語を使用して互いの考え方や気持ちを伝え合うなどの言語活動を行う際は、2の(1)に示す言語材料について理解したり練習したりするための指導を必要に応じて行うこと。また、小学校第3学年から第6学年までに扱った簡単な語句や基本的な表現などの学習内容を繰り返し指導し定着を図ること。

【解説】

この配慮事項は、今回の改訂で小学校第3学年から外国語活動、第5学年から外国語科が導入されたことを受け、前段では改訂前に「実際に言語を使用して互いの考え方や気持ちを伝え合うなどの活動を行うとともに（中略）言語材料について理解したり練習したりする活動を行う」と示されていたものを変更するとともに、後段を新しく示したものである。

言語活動は、「実際に英語を使用して互いの考え方や気持ちを伝え合うなど」の活動を基本とする。小学校の中学生の外国語活動で実践されている「自分のことや身の回りの物について、動作を交えながら、好みや要求などの自分の考え方や気持ちなどを伝え合う活動」や高学年の外国語科で実践されている「日常生活に関する身近で簡単な事柄について、自分の考え方や気持ちなどを伝えたり、簡単な質問をしたり質問に答えたりして伝え合う活動」などを踏まえて行うことが大切である。

中学校第1学年においては、特に、小学校における外国語活動や外国語科の内容、指導等の実態や生徒の興味・関心等を十分に踏まえるとともに、生徒が在籍していた小学校において、どのような時間割編成、指導体制によって授業が行われているかを把握することにより、中学校への円滑な接続を図ることが必要である。その上で、2(1)に示す言語材料について「理解したり練習したりするための指導」を必要に応じて行うことができるよう指導計画を作成することが大切である。

また、言語材料について理解したり練習したりすることが目的となって、単に繰り返し活動を行うのではなく、生徒が言語活動の目的や言語の使用場面を意識して行うことができるよう留意しなければならない。小学校段階で「聞くこと」、「話すこと」に加えて「読むこと」、「書くこと」を通して学んだ簡単な語句や基本的な表現などの学習内容については、言語活動において具体的な課題等を設定するなどして、意味のある文脈の中でのコミュニケーションを通して繰り返し活用し定着を図ができるように指導を行うことが求められている。その際、ICT等を活用した効果的な言語活動の工夫や、生徒が自らの学習活動を振り返って次につながる「主体的な学び」ができるようにすることも重要なとなる。

(参考) 前回の中学校学習指導要領(平成20年告示)

内容 (2) 言語活動の取扱い ア

(ア) 実際に言語を使用して互いの考え方や気持ちを伝え合うなどの活動を行うとともに、(3)に示す言語材料について理解したり練習したりする活動を行ふようにすること。

(イ) 実際に言語を使用して互いの考え方や気持ちを伝え合うなどの活動においては、具体的な場面や状況に合った適切な表現を自ら考えて言語活動ができるようにすること。

(ウ) 言語活動を行ふに当たり、主として次に示すような言語の使用場面や言語の働きを取り上げるようにすること。



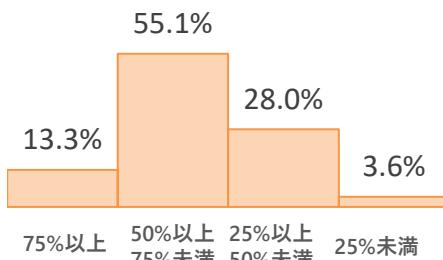
参考資料・データ

教師の英語使用状況

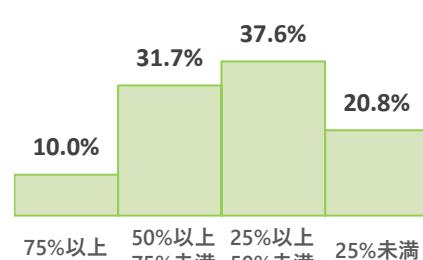
- 中学校では、約7割の学校で英語担当教師が「発話の半分以上を英語で行っている」
- 高等学校では、約4割の学校で英語担当教師が「発話の半分以上を英語で行っている」
(ただし、英語教育を主とする学科及び国際関係に関する学科では約8割)
英語コミュニケーションと比べ、論理・表現では英語による発話の割合が少ない傾向

中学校（全体）

※1

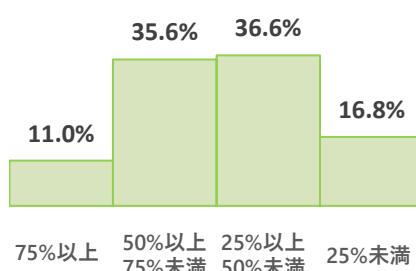


高校（全体）

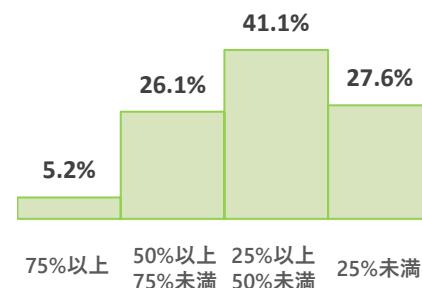


【科目別】※2

英語コミュニケーション

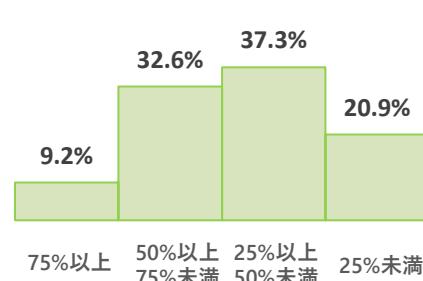


論理・表現

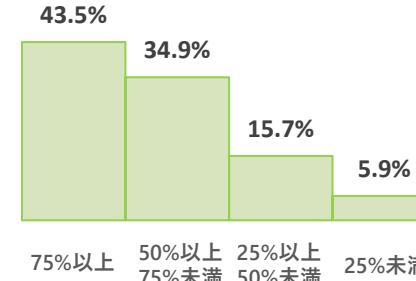


【学科別】

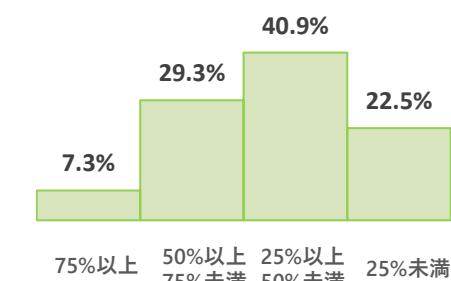
普通科



英語教育を主とする学科 及び国際関係に関する学科



その他の専門学科 及び総合学科



※1 中学校はR5調査、高校はR6調査。ここで「教師」とは、調査基準日時点において英語の授業を担当している者（臨時的任用の者及び非常勤講師も含む。）

※2 【英語コミュニケーション】は英語コミュニケーションI～III、【論理・表現】は論理・表現I～IIIの回答を合算して集計している。

なお、対象学科は「普通科」と「その他の専門学科及び総合学科」とし、「英語教育を主とする学科及び国際関係に関する学科」は含んでいない。

授業は英語で行うことを基本としつつ、生徒の理解の程度に応じた、暫定値 教師による英語と補助的な日本語の使用が必要

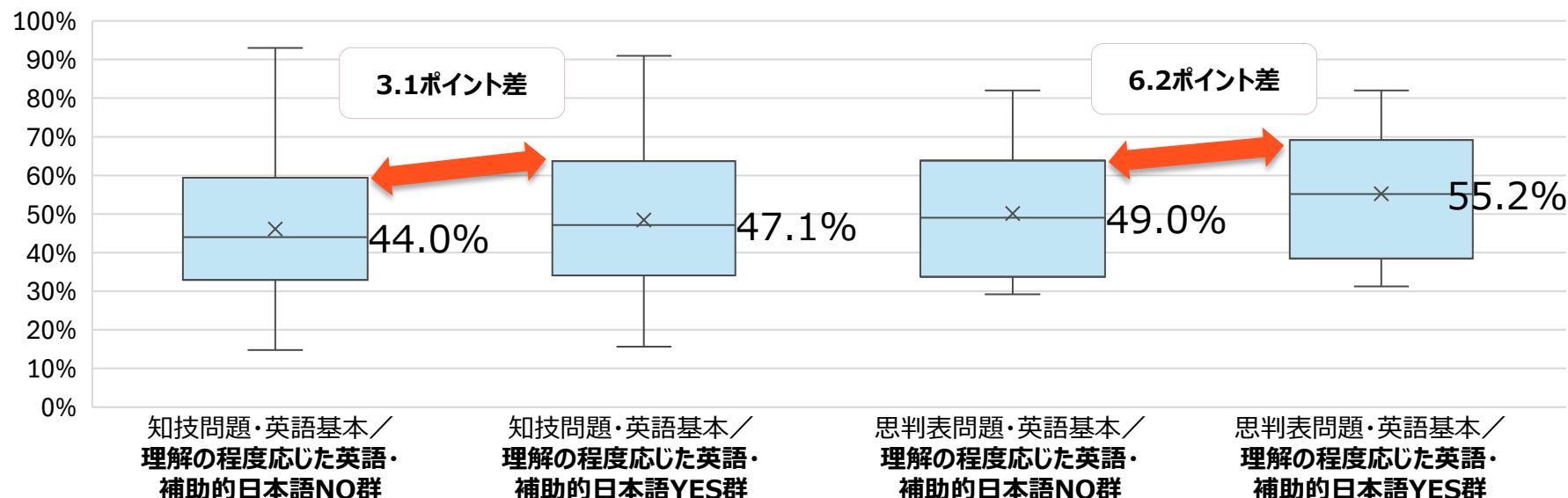


「英語で授業を行うことを基本としている」という質問に「どちらかといえばそうしている」「そうしている」と回答している教師の指導を受けている生徒の問題の通過率と、「どちらかといえばしていない」「そうしていない」と回答している教師の指導を受けている生徒の問題の通過率とを比べると、中3では、「知識・技能」問題の中央値では**0.9ポイント**、「思考・判断・表現」問題の中央値では**1.3ポイント**、前者の通過率が高い。



「英語で授業を行うことを基本としている」と「英語の授業で、生徒の理解の程度に応じた英語を用いたり、補助的に日本語を用いている」という質問の両方に「そうしている」と回答をしている教師の指導を受けている生徒の問題の通過率と、後者の質問のみ「そうしていない」あるいは「どちらかといえばしていない」と回答をしている教師の指導を受けている生徒の問題の通過率とを比べると、中3では、「知識・技能」問題、「思考・判断・表現」問題のいずれにおいても、おむね前者の**通過率が高い傾向**（「知識・技能」問題の中央値では**3.1ポイント**の差、「思考・判断・表現」問題の中央値では**6.2ポイント**の差）を確認することができる。

- 「英語で授業を行うことを基本としている」と「英語の授業で、生徒の理解の程度に応じた英語を用いたり、補助的に日本語を用いている」の回答の組み合わせを元に2群を取り出した際の、「知識・技能」問題、「思考・判断・表現」問題の通過率の平均の分布（中3）



※本資料はあくまで盛り込むべき要素の案を示したものであり、実際の総則及び解説の文章は議論を踏まえて引き続き検討。

総則に盛り込む要素（案）

第3 教育課程の実施と学習評価

1 主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善 (主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善) 中略

（個に応じた学習過程の充実）

- 多様な特性等を有する児童生徒に主体的・対話的で深い学びを実現できるよう、個に応じて学習過程の工夫を図る
- その際、単元や題材などの内容や時間のまとまりの中で、児童生徒が学習の見通しを持ち、よりよく学ぶことができるよう方略を工夫したり、振り返ったりしながら、自らに適した学習過程となるよう調整できる機会を計画的に取り入れるよう工夫する
- また、知識及び技能を生きて働くものとして確実に習得していくことも含め、児童生徒が個に応じて資質・能力を身に付けることができるよう、教師による学習環境の設定、指導方法、指導体制上の工夫改善を行うなど、個に応じた指導の充実を図る

（デジタル学習基盤等の効果的な活用）

- コンピュータや情報通信ネットワークなどで構成されるデジタル学習基盤は、多様な特性等を有する児童生徒に主体的・対話的で深い学びを実現する基礎となるものであり、これらを児童生徒が日々の学習や学校生活において活用するのに必要な環境を整えるとともに、適切に活用した学習活動の充実を図る

情報機器の基本的操作やプログラミング活動について（小学校のみ）は、各教科等における充実に伴い、総則における扱いの整理が必要

- また、各種の図書資料・統計資料や新聞、視聴覚教材や教育機器などの教材・教具の適切な活用を図る

全体として、趣旨や方針を端的に示し、
具体的な留意事項等は可能な限り解説に記載する

解説で記載する要素例（案）

- ・児童生徒の多様な特性や発達段階等の実態を踏まえて、全ての児童生徒に主体的・対話的で深い学びが実現できているかという視点を持つことの重要性
- ・そうした視点から個に応じた学習過程の工夫を行っていく上で、個別最適に学ぶ場面と協働的に学ぶ場面それぞれのよさを活かし、一斉・協働・個別といった学習場面を効果的に配置するなど、教師が必要な指導性を発揮しつつ、個別最適な学びと協働的な学びを一体的に充実することの重要性
- ・その際、孤立した学びに陥ったり、集団の中で個が埋没することのいずれも避けるとともに、教師が必要な支援や指導を行わないといったことに繋がらないよう留意することの必要性
- ・「深い学び」を実現する上で、教師の一斉による指導も効果的に実施するとともに、児童生徒自身が自ら考え知識等を構成することができるようしていくことの重要性
- ・1コマで学習を完結させるのではなく、単元・題材等のまとまりで学習過程を工夫することの重要性
- ・「学びに向かう力・人間性等」を4つの要素で整理したこととの関係
- ・児童生徒の学習過程において、見通しを持つ（学習前）・方略を工夫しながら学習を進める（学習中）・学習の成果を外化し振り返って次の学習に繋げる（学習後）といったプロセスを児童生徒が円滑に行なうことができるような教師の指導や支援の重要性
- ・よりよく学習するための方略を、教師や他者の取組から学びながら自ら工夫し、徐々に高度化する視点
- ・こうした学校での学習を経て、家庭学習の内容を自律的に決定できるようにしていくことなど、家庭学習を含めて学習習慣を形成し、学びを広げ深めていく視点 等
- ・児童生徒の学習の調整を含めて、児童生徒理解に基づく教師による単元全体の構想の必要性
- ・児童生徒が学習に前向きな見通しを持つことができるよう、単元計画を児童生徒にあらかじめ分かりやすく共有することや、学習意欲を高める工夫等の重要性
- ・児童生徒が学習を工夫しながら進められるよう、子供の学習過程を見越した適切な課題や多様な学習活動の展開を可能とする学習材の準備、つまずきを予想した足場かけ、相互に学び合いながら安心して学習ができる環境構築、効果的な学習に関する科学的な知見も踏まえた学習方略の指導・年間指導計画の作成等の重要性
- ・学習前に分かりやすい評価計画・評価規準を示すことや、学習中・学習後等に学習状況をメタ認知して振り返る機会を設けること等の重要性
- ・児童生徒の興味・関心を生かした自主的、自発的な学習が促されるよう、児童生徒が自ら学習課題や学習活動を選択する機会を設けるなどの工夫を行うことの重要性
- ・学習内容の習熟の程度に応じた学習等、現行の「個に応じた指導」で示している工夫例
- ・小学校の専科指導や交換授業、チーム・ティーチング等の指導体制の工夫例 等
- ・デジタル学習基盤の役割
 - ①多様な児童生徒にとっての包摂性を高めながら、教師に持続可能な形で主体的・対話的で深い学びを通じた資質・能力の育成に資する学習環境を実現できること
 - ②教師の指導のツールとしての側面に加え、学習者の学習ツールとしての側面を有しており、児童生徒にとっての学びやすさの向上や合理的配慮の基盤として働くこと
 - ③デジタルカリアルカ等の二項対立に陥らず、デジタルも最大限活用して一人一人の豊かな学びを充実させる視点が重要であること
 - ④デジタル学習基盤の環境整備における設置者の積極的役割 等

◆自己調整学習のサイクルや、それを促進する要素等に関する研究上の知見

○自己調整学習のサイクル

目標の設定や、効果的に進める工夫（方略）などの計画を行い、興味や自信をもつ

予見（学習前）

自己の学習状況を把握（メタ認知）し
ながら方略を工夫して学習を進める

遂行（学習中）

「自己調整学習」
3つのサイクルを自律的に
循環させ、学びを深める

内省（学習後）

学習結果の原因・理由や方略の効果等に
ついて振り返り、次の学習につなげる

自己調整学習の効
果を高め、学習成
果に繋がりやすくする

(Zimmerman&Schunk(2001))を基に作成

○自己調整学習の効果を高める方略の例

動機づけ方略

質の高い学習を開始・継続することができるよう、自らの動機づけ（モチベーション）や感情を整える方略

参考資料⑧参照

学習方略

学習内容をよりよく理解し、定着させ
ることができるよう学習中の情報処理
の方法等を工夫する方略

参考資料⑨参照

メタ認知的方略

学習方略がうまく働きよりよい学習成果に
結びつくよう、自身の学習過程の計画・把
握・調整・振り返り等を適切に行う方略

(Usher&Schunk(2018))を基に作成

○方略の指導に関する類型

※研究では、教師による方略の直接的な教授の有効性が示されている

直接的な指導

「～しましょう」等の形で発揮させたい
方略を直接的に指導

間接的な指導

「～したいときはどうすればよいか」等の
形で、方略を間接的に気づかせる

学習環境設定の工夫

教師による指導は行わず、子供自身が自然
と方略を工夫するような学習環境を整える

(Dignath et al. (2022) を基に作成)

◆子供が自ら学習を調整しながら学びを進めるための学校現場の実践例

参考資料⑩参照

単元や題材の設計

- 子供達が意欲的に取り組むことができ、全ての子供が育成したい資質・能力を育むことができるような単元や題材の設計
- 単元全体の目標や内容、流れを子どもと共有することで学習の見通しの明確化
- 個別・協働・一斉といった学習活動の効果的な配置

多様な学習材料の提供 足場かけの準備

- 子どもが自分の力で学ぶことができ、自らにとって学びやすいものを選択できる多様な材料の提供
- 子どもの特性や学習スタイルに応じて選択できる多様な学習材料の提供
- 学習の見通しを持つことや学習の進捗状況の把握、学習の振り返りがしやすい学習材の開発 等

学習環境の整備

- 安心して学習に取り組める空間づくり
- デジタル学習基盤も活用しながら、生徒間や外部との協働を通じた学びの深まりや、生徒自身が学習に必要な情報に必要なタイミングでのアクセスを可能とする 環境づくり 等

教師による自己調整学習の促進の例

(Dignath et al. (2022) "Assessing How Teachers Enhance Self-Regulated Learning Coding Guide"を基に作成)

令和7年12月15日
総則・評価特別部会
資料1-1 P5

動機づけ方略

質の高い学習を開始・継続することができるよう、自らの動機づけ（モチベーション）や感情を整える方略

学習課題の意義づけ・価値づけ

取り組む学習が、目標に照らして努力に見合う価値があると実感することで動機づけを高める

学習環境の調整

自身が学習に集中できるように学習環境を整える

他者との協働や支援の活用

友達に聞く、協働する、教師や保護者の支援を求めるなど、学習を進める上で必要な社会的リソースを整える

自己肯定感の維持

学習成果の要因を、変えられない又は外部的な要因（自らの能力等）に求めず、自分で変えられる又は内部的な要因（学習方略等）で捉え、自己肯定感を支える

意思や注意のコントロール

学習に関係のない思考を抑え、学習の目標を達成するための活動に注意を振り向ける

学習方略

参考資料⑨参照

学習内容をよりよく理解し、定着するよう学習途中の情報処理の方法等を工夫する方略

反復方略

学習した内容が長期記憶として定着するまで、繰り返し学習できるようにする

精緻化方略

理由や意味を付け加えるなど、新たな学習内容を、既存の知識と関連付けて深く理解できるように工夫する

組織化方略

同じ点に着目して情報を整理する、内容を要約するなど、新たな学習内容の中で関連付けを行い、体系的に理解できるように工夫する

メタ認知の方略

学習方略がうまく働き、よりよい学習成果に結びつくよう、自身の学習過程の計画・把握・調整・振り返り等を適切に行う方略

計画方略

学習活動に先んじて、学習過程の計画、目標設定、学習方略の選択等を行う

モニタリング方略

学習過程において理解度等を自分に確認することで、学習の進捗を確認する

評価方略

実際の学習活動終了後、学習の進捗を当初の学習目標と照らし合わせる

調整方略

学習目標を達成したか確認したあと、進捗状況に応じて自身の学習方略等を調整する

自己調整学習を促進する教師の関わりの類型

①直接的な方略指導

: 教師が方略を意図的に指導することで、児童生徒の方略に対する認識と、具体的な行動を促す

②間接的な方略指導

: 教師は特定の方略を明示しないが、問いかけ等を通じて児童生徒の方略に対する認識と、具体的な行動を促す

③学習環境設定の工夫

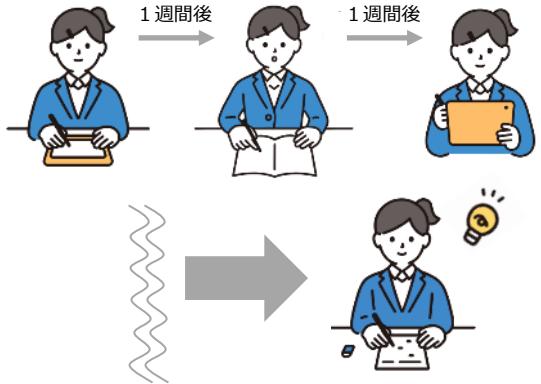
: 児童生徒が自己調整学習を行う必要がある環境を設定し、児童生徒が自然と方略を工夫していくことを促す

認知心理学の知見に基づく効果的な学習方略の例

令和7年12月15日
総則・評価特別部会
資料1-1 P6

分散学習

時間の間隔を空けて復習することで、長期的に学習内容を定着しやすくする



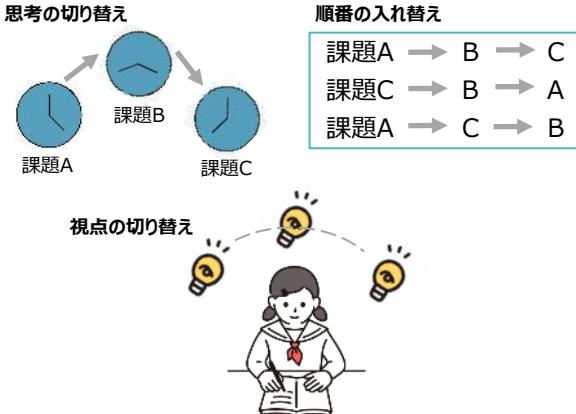
検索練習

学習内容を積極的に思い出す練習をする事で、記憶の定着と新しい状況での応用につながる



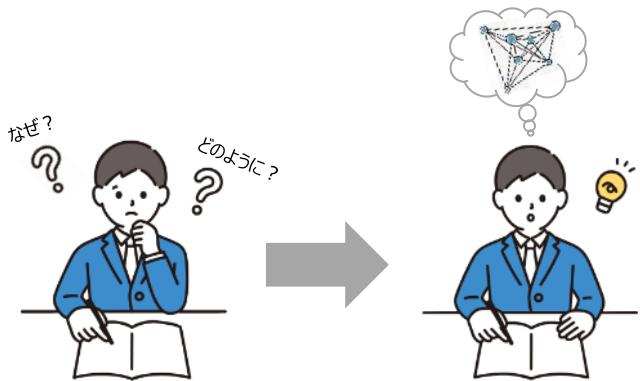
交互配置（インターリーブ）

同じような問題を解き続けるのではなく、トピックを切り替ながら学習する



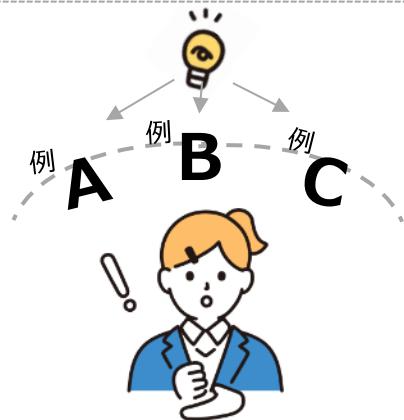
精緻化

理由や意味など、学習している内容に情報を加えて深く、多角的に理解する



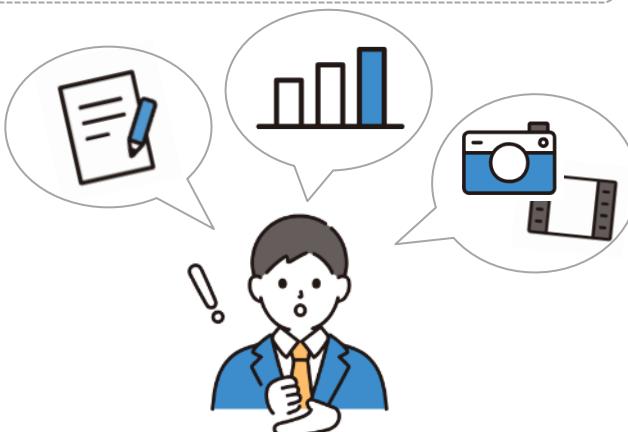
具体化

抽象的な概念を学習する際、具体的な例を用いて説明する



二重符号化（デュアルコーディング）

言語的な情報と視覚的な情報を組み合わせることで、情報を思い出しやすくなる



初歩の学習者と上達した自己調整学習者の比較

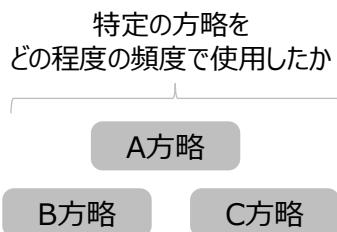
自己調整の段階	自己調整学習の区分	
	初歩の自己調整学習者	上達した自己調整学習者
予見 (学習前)	漠然とした目標 ご褒美や他者より高い成績を得ることを重視 学習に不安を抱き、学習を避ける 課題やスキルに関心がない	具体的で順序立てられた目標 自分の能力を高めることを重視 高い学習意欲 課題に強い興味を持ち、積極的に取り組む
遂行 (学習中)	動搖しやすく、周りの環境に影響される 失敗に備えて言い訳を用意したり、自らハードルを下げたりする 自分の行動を振り返らず結果を過大評価する	学習に集中する 課題の進め方を言葉にしたり、情報を視覚的にイメージしたりするなど方略を意識して学習を進める 自分の行動を振り返りながら学習方法を見直す
内省 (学習後)	自己評価を避け、他者との比較をする マイナスの結果を自分の能力のせいにし、その後の学習方法の改善を行わない	自己評価を行う マイナスの結果を学習方法や練習量に照らして振り返り、改善を行う

(参考) 第二言語習得における自己調整学習に関する研究上の知見

語彙習得における自己調整能力を測る手法の開発

- Tseng et al. (2006)は、学習者が使う個別の方略（静的な方略リスト）よりも、自らの学びを改善しようとする内面の動的な自己調整能力に着目。
- 教育心理学の知見を応用して、語彙習得における「自己調整能力」を測定する手法(SRCvoc: Self-Regulating Capacity in Vocabulary Learning scale)を開発。
- 本手法は日本人のEFL環境 (English as a foreign language: 非英圏で学ぶ外国語としての英語) における有効性も示唆されている (Mizumoto & Takeuchi(2012))。

静的な方略リスト



学習者が動的に自己調整(Self-regulation)するプロセスに着目



Self-Regulating Capacity in Vocabulary Learning scale
(SRCvoc)

Dörnyei (2001) の5つの自己動機付け方略を踏まえ、
語彙習得における自己調整学習能力の測定手法を開発
(全20項目 (各プロセスにつき4項目))

(参考) Dörnyei (2001) による5つの自己動機付け方略 (self-motivating strategies)

- コミットメント・コントロール (Commitment control): 学習目標への決意を維持・強化する能力
- メタ認知的コントロール (Metacognitive control): 集中力を監視し、先延ばしを防ぐ能力
- 飽き・倦怠感のコントロール (Satiation control): 退屈を解消し、学習への興味を維持する能力
- 感情コントロール (Emotion control): 学習を妨げる不快な感情やストレスを管理する能力
- 環境コントロール (Environment control): 学習環境を整え、プラスの環境刺激を利用する能力

- (例: 目標達成を確信し、困難でもやり抜く)
- (例: 集中を維持するテクニックを知っている)
- (例: 学習が単調になっても意欲を再燃させる方法を知っている)
- (例: ストレスを感じた時の減らし方を知っている)
- (例: 集中できる場所を探したり、学習を効率化する環境調整を行う)

自己調整学習のための方略指導に関するメタ分析

- Plonsky (2011) は、第二言語（外国語）習得における自己調整学習のための方略指導 (strategy instruction) の効果を検証したメタ分析を実施。
- 過去30年間の研究データから61件の主要研究（計95サンプル）を抽出し、定量的かつ包括的な分析を通じて指導の有効性を測定。
- 分析の結果、方略指導は第二言語習得において小規模から中程度の全体的な効果 ($d = 0.49$) をもたらす一方、その成果は様々な媒介変数によって左右されることが示された。（例：学習環境（第二言語／外国語）、指導される方略の種類や数、方略指導期間の長さ、学習者の習熟度）

(出典) 以下の文献を参考に、文部科学省作成。

Dörnyei, Z. (2001). Motivational Strategies in the Language Classroom. Cambridge: Cambridge University Press.

Dörnyei, Z., & Ryan, S. (2015). The psychology of the language learner revisited. Routledge.

Mizumoto, A., & Takeuchi, O. (2012). Adaptation and validation of self-regulating capacity in vocabulary learning scale. Applied Linguistics, 33, 83-91.

Plonsky, L. (2011). The effectiveness of second language strategy instruction: A meta-analysis. Language Learning, 61(4), 993-1038.

Tseng, W.-T., Dörnyei, Z., & Schmitt, N. (2006). A new approach to assessing strategic learning: The case of self-regulation in vocabulary acquisition. Applied linguistics, 27(1), 78-102.

(参考) 言語学習方略 (LLS : Language Learning Strategies) の 6 分類

言語学習方略とは

自分を認知的・感情的・社会的にコントロールするために具体的な状況の中である程度意識的に学習者が選択し、使用する複雑かつダイナミックなものの考え方や行動
※学習者は自分の学習状況に合わせてどの方略を使うかを決める

言語学習方略の目的

- (a) 言語タスクの達成 (b) 言語の運用・使用の向上 (c) 長期的な熟達度発達の促進

直接方略

単語の暗記、文やスキットの暗唱など
第二言語学習の記憶に関する学習方略
(例) 語源、イメージの活用

記憶方略
Memory-related

メタ認知方略
Metacognitive

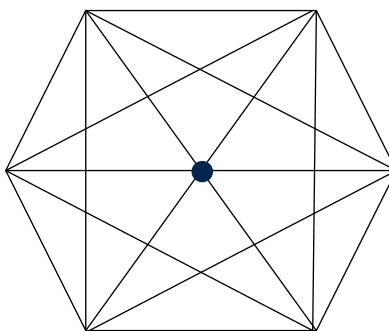
間接方略

学習を継続するための中長期的な展望の中で、学習者が自分で自分の学習を進めていくための学習方略
(例) 学習計画、目標設定、自己評価

テキストや会話の意味理解、文法の体系的理解など目標言語の認知的な操作に関する学習方略

(例) 類推、要約

認知方略
Cognitive



情意方略
Affective

意思疎通がうまくいかない時に、言語知識やコミュニケーション能力の欠如を、さまざまな方法で克服して会話を続ける方略
(例) ジェスチャー、知っている事柄から推測する、知らない単語を言い換える

補償方略
Compensatory

他者との協力関係を積極的に構築しながら学習を進める学習方略
(例) 質問する、誤りを訂正してもらう

※上記は言語学習方略を分類したものであるが、語彙や文法、動機付け等の項目毎に様々な学習方略の研究が蓄積されている。

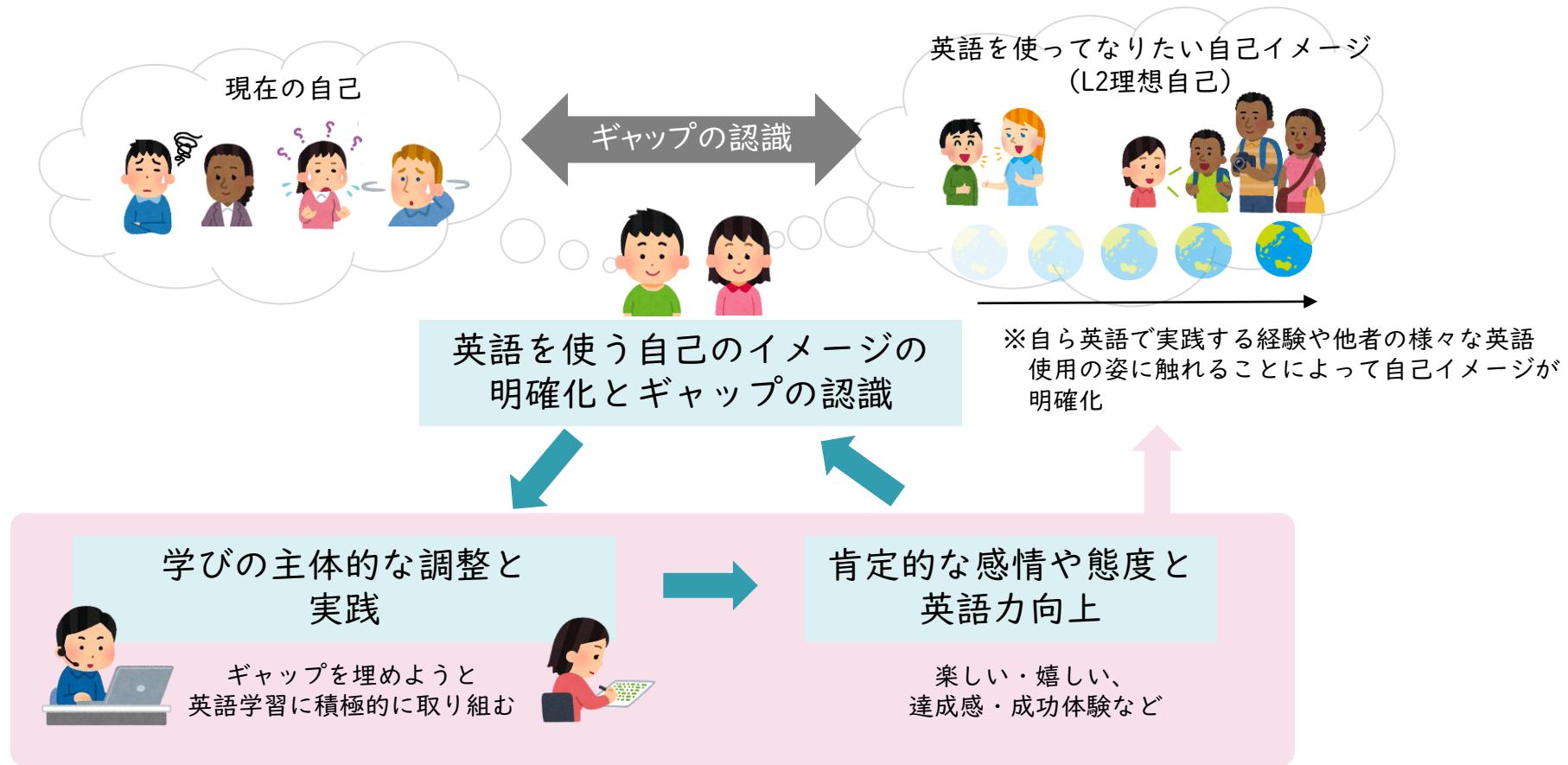
(出典) 以下の文献を参考に、文部科学省作成。

河合靖.(2018).「学習方略：英語学習の多様性に影響を与える行動要因」,酒井英樹・廣森友人・吉田達弘編著,「学ぶ・教える・考える」ための実践的英語科教育法.大修館書店.

廣森友人.(2023).「改訂版 英語学習のメカニズム—第二言語習得研究にもとづく効果的な勉強法」.大修館書店.

※図：河合(2018)のp156に掲載されている「言語学習方略 6 分類の直接・間接方略群（出典：Oxford (1990.p.15) をもとに改変）」等を基に作成。

(参考) 英語を使う自己のイメージの明確化と学びの自己調整の循環プロセスのイメージ



<参考>

- Dörnyei (2005) は、L2（第二言語）の学習に関し、「L2理想自己」「L2義務自己」「L2学習経験」の3つの要素から構成される「L2動機づけ自己システム（L2 motivational self-system）」を提唱。これらの3つの要素が言語学習の動機づけに大きな影響を与えることが多くの研究において示されている。
- このうち「L2理想自己（Ideal L2 Self）」について、大和（2018）は以下の通り整理。
 - L2理想自己は、L2を学習する際に、「こうなりたい」と願う理想的な自己の姿である。英語を学ぶ多くの学習者は英語を自由に話すことができたらと願っている。
 - もし、この願望が真に自らの理想とするならば、理想の自己と現在の自己との間のギャップを埋めようと英語学習に積極的に取り組むことになる。
 - 自ら主体的に将来の自己の理想とする姿を現実感を伴う具体的な形で意識できた時、学習者は初めてその「理想自己」に向かって主体的に学習活動を計画し調整することが可能になると考えられる。
- 高木他（2023）は中高生（中1・中3・高1・高3）を対象に、将来の英語使用者としての自己像の認識に関する自由記述項目を分析。中高生の発達段階において、L2理想自己は変化し、変化の軌跡も多様であるが、全ての学年で「海外旅行」「（外国）人とのコミュニケーション」「仕事」における英語使用の自己像が共通して現れた。

(出典) 以下の文献を参考に、文部科学省作成。

Dörnyei, Z. (2005). *The psychology of the language learner: Individual differences in second language acquisition*. Erlbaum.

大和隆介. (2018). 動機づけ：英語学習の多様性に影響を与える情意要因. 酒井英樹・廣森友人・吉田達弘編著. 「学ぶ・教える・考える」ための実践的英語科教育法. 大修館書店.

高木亜希子・津久井貴之・加藤由美子・森下みゆき・福本優美子. (2023). 中高生の将来の英語使用者としての自己像の認識—6年間の経年調査からの考察—. 言語教師教育 Vol.10. No.1.

森田光宏・亘理陽一・水本篤. (2025). 「好き」の向こう側—英語学習者の縦断的調査—. 外国語教育メディア学会機関誌. 62巻.